

グラツプラー刃牙 ゆうえんち

苗代

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

いじめられていた少年時代に宇名月典善によって隠れた才能を見出だされた異能の戦士、龍王院弘。血に飢えた美しき夜叉は、強敵を求め、『ゆうえんち』に挑む。

目次

暴力街

猛禽類の眼をした男であった。

背丈は並だが、がっしりとした体格をしている。

肉が厚く、鍛えた鉄のような肉体をしていた。

闇色の髪を、肩まで垂らしている。

よれよれのシャツに、シミだらけのズボン。

小汚い男であった。

男は、公園のベンチで横になっていた。

月を眺めている。

青い月だ。

月の青さが、夜天に染み出していた。

涼しさをたつぷりと含んだ風が、男の身体を包み込む。

すばらしい夜の世界であった。

村井と岡本は、夜の公園に入ってしまった。

組長の命令で、この公園をめぐらしている男を捕まえにきた。

生け捕りが難しいようであれば、殺してもかまわないということになっっていた。

4日前の夜、組の幹部と若い組員が、ぶちのめされた。

しかも、公衆の面前でだ。

幹部の岩倉は、両肩を脱臼させられ、さらには舌まで引っこ抜かれた。

岩倉のガード役の一階堂は、フルコンタクト制の空手を学んでいた。有段者ではない。

わざと段を取らなかったのだ。

有段者かそうでないかで、罪の重さが違う。

だが、二階堂は、三段に匹敵する実力を保持していた。

この世界に入ってから、刃物相手に闘ったこともあるし、素手で人を殺したこともある。

そんな二階堂も、あっさりとやられた。

右腕をへし折られ、気絶させられた。

これを聞いた組長の竹田が、他の幹部たちを集め、会議をした。それが、3日前の早朝。

二階堂の証言により、襲った相手の情報を掴むことができた。性別は男。

年齢は40前半くらい。

肩幅が広い。

酔っぱらったルンペンのような男で、汚い身なりをしている。

どんな些細なことでも話させた。

見つかるとは思っていなかった。

だが、幹部がやられたんだ。

見つかる可能性は限りなく低いのが、それなりのことをしておく必要がある。

似た特徴を持つ人間を、何人か探し出した。

二階堂を連れ、ひとりずつ確認する。

4人目の男が、まさにそうであった。

これが、今日の昼の話だ。

村井と岡本は、組の中でも、一目置かれている存在である。

ふたりとも、暴力の専門家であった。

公園に入り、すぐに例の男を見つけた。

ベンチに横になって、天を見上げている。

警戒している様子が一切感じられない。

楽勝だ。

ふたりは思った。

男が突然、立ち上がった。

「よう」

男が言った。

「なんか用かい？」

「あんたを連れてきてくれと頼まれてね」

「大人しく着いてきてくれ」

村井と岡本は、平坦な口調で言った。

「抵抗されると、それなりのことをしないといけなくなるからね」
岡本が、懐に呑んでいたナイフを引き抜いた。

大ぶりのゾーリンゲンのナイフであった。

「へえ、あんたらプロだね」

村井は、男に近づき、腕を掴もうとする。

男は抵抗した。

村井の膝を蹴った。

それだけで、村井の膝が、くの字に曲がった。

そして、男は、村井の喉に、人差し指と中指を突き込み、喉仏をつまみ出した。

「てめえー」

岡本がナイフを振るう。

それを、いつの間にか握っていた暗器——寸鉄で受けた。

鋭い金属音がした。

左足を跳ね上げ、岡本のナイフを蹴り飛ばす。

ナイフは、くるくると光の輪を作りながら、地面に落ちた。

岡本は、一瞬何が起こったのか分からないような表情をしていたが、すぐに動き出した。

男に向かって、前蹴りを放った。

かなりのスピードだ。

当たれば、あまりの激痛にもがき苦しむことになる。

男が動いた。

両手を前に出し、優しく包むように、岡本の右足を捕らえた。

刹那、靱帯のねじ切れる音がした。

「むげげげげっー」

岡本は、地面に倒れた。

顔を上げると、男と眼が合った。

猛禽類のような眼で、こちらを、じっと見つめている。

それが、たまらなく怖かった。

一刻も早く、この妖怪じみた男のもとから立ち去りたかった。しかし、今の足では、走ることはできない。

それどころか、立つこともできない。

岡本は、男に背を向け、四つん這いになって、公園の出入口へと向かった。

男は、そんな岡本に近づくと、容赦なく、股間を蹴り上げた。

岡本の肛門が、ぶつつりと裂けた。

豚に似た声を上げ、岡本は倒れ伏した。

「ふん。いい金づるができたかよ」

男は、口元に怖い笑みを浮かべた。

美しい顔立ちの男であった。

童顔である。

肌が、異様なほど白い。

人の肌とは思えない、雪のような白であった。

どこか、すつきりとした表情をしていた。

くせのない漆黒の髪をしている。

服と靴は、黒色で統一されていた。

龍王院弘——それが、この男の名であった。

龍王院弘は、東京にいた。

現在は、小田原の菊水組を離れ、東京の玄武会にいる。

今夜は、玄武会が経営しているバーで用心棒をしていた。

いわゆる、ぼったくりバーというやつだ。

会計で、法外な金額を吹っ掛ける。

払えなかったら、財布やポケットから、名刺やら携帯電話やらを取

り出し、それで脅す。

それでも効かなかったら、あとは暴力だ。

だが、大抵の客は、そこまでいくことはない。

ただし、例外もいる。

脅しや暴力を恐れていない人間だ。

今、龍王院弘の前で、店員と揉めている客も、その例外のひとりだ。レスラーのような大男だ。

筋肉質で、ごつい体格をしている。

荒事には慣れていそうな感じがする。

こういうときは、龍王院弘の出番だ。

酒の入ったグラスをテーブルに置き、大男のもとへゆく。

「龍さん」

大男の対応をしていた店員のひとりである戸次が言った。

「こいつが、代金を支払う気がないと——」

「なぜですか？」

龍王院弘が訊ねた。

「あんたも分かっているだろう？　ここは、ぼったくりバーだ。そんな店に払う金はないよ」

「ですが、実際にこの店で飲食しましたよね？　その分は払ってもらわないといけません」

「どうしても払ってほしいなら、あんたがおれと寝てくれるなら、考えないこともない」

「生憎と、ぼくには、そういった趣味はありません」

「おれだってそんな趣味はない。だが、あんたの、その女みtainな顔を見たら、気が変わっちまったよ」

「お断りいたします」

「そうかい。なら、こうするしかないだろう」

巨大な拳が、龍王院弘に向かって繰り出された。

その拳を、横から軽く撫でる。

たったそれだけで、拳がそれていった。

「脚一本」

「なに？」

「落とし前です」

龍王院弘は、大男にローキックを放った。

物凄い速度である。

それは、大男の左脚にヒットした。

たった一撃で、大男の脚が折れた。

みつともない声を上げながら、大男は倒れた。

後始末を戸次たちに任せ、テーブルに戻って酒を飲む。
扉が開き、ひとりの男が入ってきた。

細身の男であった。

身長は175cm前後だろう。

無精髭を生やしている。

黒いズボンを穿き、白いシャツの上から、革ジャンを着ていた。

磯村露風であった。

「おやつ？ お取り込み中だったかい」

「いえ、先程終わったところですよ」

そうかいそうかい、と言いながら、磯村露風は龍王院弘の前に座った。

「龍さん、こちらの方は？」

戸次が訊ねてきた。

「磯村露風さん。ぼくの師匠の知り合いですよ」

龍王院弘は、戸次に磯村露風を紹介した。

「それで、露風さん。今夜はどのようなご用件で」

「用件がなきや来ちゃだめだった？」

「そういうわけではありませんが」

「冗談だよ。実は、おもしろい話を持って来たんだ」

「なんでしょう」

「『ゆうえんち』に興味はあるかね？」